

## 令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 県知事賞 優秀賞

「 これまでの災害を無駄にしないために 」

鹿児島市立鹿児島玉龍中学校 2年 鳥越 思嬉とりごえ しき

1993年8月6日。鹿児島市を中心とする、鹿児島県にとって忘れることのできない大きな出来事が起こった。

8・6水害。死者48名、行方不明者1名、重軽傷者52名にも及んだ。今年でちょうど30年。様々なテレビ番組で8・6水害について取り上げていた。私が見たニュースでは、人々の腰のあたりまである水や多くの流されている車、浸水してドロドロになってしまった家など、本当に鹿児島であったことなのか疑うほどの被害だった。そのニュースでは、当時家族と連絡がつかず避難場所で涙を流す人もみられた。今になっても家族や親族を亡くした人々は毎年8月6日になると8・6水害を思い出し、悲しんでいると思う。しかし、この状況が本当に鹿児島で起こったのか信じられなかった私は、実際に8・6水害を体験した祖母に聞いてみることにした。

すると祖母はこんなふうに話してくれた。

「もう、30年も経つんだね。この前のことのように思い出すよ。あの日はバケツをひっくり返したような大雨だったんだよ。夫は仕事に行っていたのだけど、家にいる私と息子を心配して豪雨の中頑張って帰ってきてくれんたんだよ。」

祖母は8・6水害のときの大変さを少しだけ苦しそうに話しているように見えた。しかしゆっくり、じっくり分かりやすいように話してくれた。これだけの話でも祖母の様子や口調で災害時の大変さは伝わってきたが、この後の言葉に驚いた。

「夫が帰ってきた後、その帰ってきた道は土砂崩れがおきて道路がふさがれたんだよ。だから帰ってくるのがあと少し遅かったら、土砂崩れに巻き込まれていたかもしれないね。本当に運が良かったよね。」

と言っていた。私はこの2つのことを聞いて、8・6水害の印象は相当強かったのではないかと思った。この前のことのように思い出すということは、それだけ心に残る経験をしたということだと思う。それに、災害の怖さ・大変さも改めて痛感した。いつ災害が起きてもおかしくないときに行動するのは怖いし、万が一土砂崩れなどの災害に巻き込まれて、自分の身に何かあっても助けを呼ぶことができずに亡くなってしまうかもしれない。私の祖父母の家の周りには山も川もなく、道路より少し高いところに建っているためたまたま洪水が起きたり、何も壊れたりしなかった。しかし、祖父のように家に帰ってきている途中に土砂災害に巻き込まれることはないとは限らない。だからこそ、このような災害のときは全てにおいて万が一のことを考えて行動すべきだと思う。「この前は大丈夫だったから」「ここは崩れてこなそうだから」と自分で勝手に解釈せずに、災害時は常に警戒心をもって行動してほしい。

私は、ニュースや祖母の話を通して災害時に大切なことは主に3つあると考えた。

1つ目は、防災バッグを準備しておくことだ。いつ何が起きてもすぐに逃げられるように、水・非常食・簡易トイレ・懐中電灯など必要最低限のものは入れて常備しておくと思う。

## 令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 県知事賞 優秀賞

2つ目は、災害が起きる前に家族ともしはぐれたときの避難場所や集合場所を話し合っておくことが大切だと思う。普段から災害時について家族とコミュニケーションをとっておくことで、もしはぐれてしまっても連絡手段などの行動に戸惑いなく動けると考えた。

3つ目は、自助・共助を大切にすることだ。まずは自分や自分の家族を一番大切にしてほしいが、災害はおさまった後でも多くの人が不安を感じていると思う。だから、避難場所での生活をはじめ、倒壊した家や物の片付けなど、地域で助け合うことが大切になる。無理をせずに自分にできそうなことを見つけ、少しだけでも協力することで、災害の苦しみや悲しみを地域の人々と乗り越えることができると思う。

災害は建物や街だけではなく、心にも被害を及ぼすものだとは私は考えている。人間は自然災害には勝てない。だからこそ、災害への対策を日頃からしていくことが、人間が自然災害に対応するための第一歩だと思う。